

政宗騎馬像余話

小室達・日記から



▷④

に見るとの
ある人なら
は、その大き
さは圧倒され
るだろう。
騎馬像は実
に十二戸八寸
（約四・一八
メートル）の
大作で
ある。計画を
聞けば、東京
美術学校彫塑

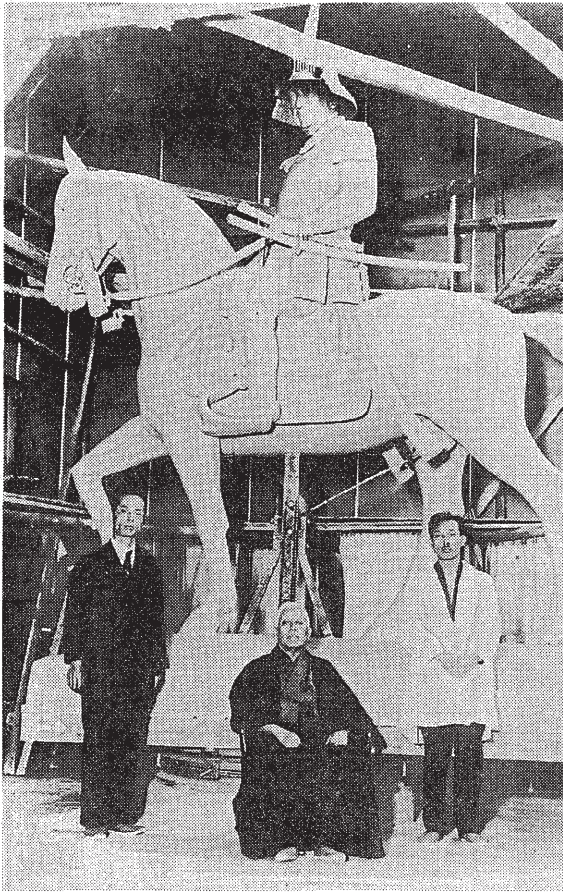
制作の苦しみ

北新報は、この日の小室の意気込みを次のように伝えている。
「帝服の制作も休んでもつばらの仕事に没頭してきた小室氏は「私はなかなか落祖公の銅像をつくるこの日のために彫刻家になんてきたような気がしません」と真心むき出しに制作の苦心とその幸福を述べた。」

東宮の小室の自宅に完成したアトリエが、興や青年団の関係者などに披露された。高さ二十五尺（約七・六メートル）出来上がったばかりの銅像のひな型を囲んで、いすの奥、動中静の姿した立つ政宗公の雄姿に思いをはせたに違いない。

「この度の大役、仙台藩長門領三にあたる手紙の中に生まれた生とじては若きこの上なく、畢（ひ）生の大事業として、必死の覚悟で制作に精進、万難を排して大傑作と心願致し居（お）り候（こう）ぞうらうらう」
昭和八年、伊達政宗騎馬像の制作者と呼ばれた小室達は、いわば住者に当たる県連合青年団の指導者町公民館にある彫刻を問進

科を席で卒業、美術界に輝かしい足跡を残していた小室はあっても、ブレンシートを相当感していたに違いない。
この年から二年間、小室の日記は騎馬像との闘いに明け暮れた日々であつて、昭和八年7・21政宗に関して研究しその人



原型が完成し近づき、旧仙台藩水沢出身の斎藤寅次郎が小室の制作を助ましたアトリエを訪れた

助言に一喜一憂

また、日記に戻ろう。
2・24 日、政宗公等身のひな型の土付け開始す。まず立派に完成するよう祈願し地土より始め、粘土が相当乾びていゝので相手を折る。
4・14 岩沼藩民より來信、四股の関所に対し非を働きなまかり出してし由を告げ、かゝる凶を示すや、まず馬のつね、あおり、くらが相違し、太刀、脇差、胴のむ、飾り心も、あこむちを改正要すべく、また毛靴は草鞋に、鬘子は髪髻に直すべきものと、御意見であった。三日の付書問所は二つとなく、なほ月型はもとごとくす。おきもなりの忠言、太刀、くら下、あおり、くらを準備して帰る。相違を解す。
11・5 長門氏に電話すれども不在なりしが伝言をたのむ。三時半ごろ電話あり。三分後斎藤藩長門白仙台藩水沢出身、首相、海軍大将、と見えると言ふ。横田閣下（陸軍少将、陸軍官）も勇助、全体にわたり個所なくと見えて、修正の箇所なしと云ふ。長門氏に案内せられ、陣和服に出来る。
11・7 政宗公本制作も完成期が近いので大に努力す。きょう中に完成せし明日は写真撮影と蓋印に並ぶつべく十二時まで仕事続行す。今もつて心残りなるところあり、改進す。時に午前三時だった。
11・8 原型完成す。

常人の注意あり物に就つておろしんこと。至急岩沼へ来たれどこのことある。気が勝り制作に気が乗らぬ。
6・19（日本から）ちゅう研究の権威者、山上八郎氏を訪ねた。貞公銅像依頼を受け、且下り、制作中にして是非先生の御教示